

市史講座第3回ミニレポート

6月21日(土)第3回の講座が開かれました。

第1部：「模範村」とその時代(講師:島根大学法文学部教授 竹永三男 先生)



日本は1905年(明治38)に日露戦争に勝利したものの、戦費を膨大な借金(外債)と増税に依存したものでその代償は大きく、国家財政は危機に瀕していました。そして、戦中・戦後と続くそうした経済的負担と戦後の行政事務の増大とによって明治国家の基盤たる町村(行政村)は疲弊しきっていました。

そこで、このような国内の状況に対処するため、政府によって日露戦後経営(軍備拡張・生産力増強)が展開され、その一環として疲弊した町村を立て直すべく地方改良運動が実施されました。

この地方改良運動の目標は、日露戦後の経済的負担と増大した行政事務に耐えうる町村をつくりだすことであり、それを達成した町村は「模範村」として政府より表彰されました。

現在の松江市域は全国的に見て「模範村」集中地帯(旧熊野村・旧岩坂村・旧大芦村・旧大庭村)であり、竹永先生の講演では該当する4村の事例をもとに日露戦後の松江市域の歴史的特徴について説明されました(資料参照)。

講演では地方改良運動の一環として実施された1911年の八束郡青年会の視察旅行についての詳しい説明や、各模範村における神社整理(1村1社化、行政村内の統括の一環)のありようから各村々の多様なあり方を指摘されるなど、新たな史料調査・研究の成果を盛り込んだ内容でした。

第2部：「石が語る出雲国」(講師:島根大学名誉教授 澤田順弘 先生)

澤田先生は会場に、硬い黒曜石から軽い軽石、メノウや松江市周辺各地から産出した石の標本を展示し、石器時代からの人間と石との関わりを興味深く話されました。

出雲地方で、12万年から11万年位前ではないかとされる「石器」と思われるものが発見されたのは、平成21年の事でした。これが石器であるとするなら日本最古のものだそうです。この話を導入にして、石にまつわるロマンあふれる講義が、熱気を持って語られました。

石は人類が道具として最初に使った物であり、生きるための道具として、青銅器・鉄器が出現するまでそれを加工し工夫することで、重要な道具として利用されました。

およそ3万5千年前の後期旧石器時代から縄文時代にかけて黒曜石・玉髄・石英・安山岩・玄武岩などが石器として使われ、黒曜石は隠岐島後産の物が本土各地、遠くはロシア東縁地でも見つかっています。黒曜石は砕かれるとガラスの如き鋭利な道具となりましたので、この時代の人間の道具として優れて必要なものだったのでしょう。隠岐が本土と地続きだった氷河期には徒歩で運ばれ、その後の海面上昇によって海となってからは舟で運ばれたとのことです。

次いで鉄器時代になっても石との関係は密接でした。鉄製品を作るのに花崗岩の構造物質のチタン鉄鉱が大事でした。中国地方では山陰側の花崗岩に含有される鉄とチタンの割合は、山陽側に較べてチタンより鉄が多い磁鉄鋼であるために、たたら製鉄による良質な鉄を産する土地柄であったとのことです。

松江城の城壁のうち、本丸の石垣は約8割が矢田地区で産出される石であり、残りは大海崎産とのことです。その他、忌部の石、美保関森山産の石が使用されていることが分かっているそうです。



この他、荒島石は 1500 万年前の広瀬月山の噴火で噴出した火砕流(軽石流)の堆積物であるとか、来待石について、古代出雲国を代表するメノウや碧玉について、大根島の溶岩隧道についてなど、時間いっぱい、黙して語らない石に秘められた何千万年前からの歴史をお話になりました。

そして、島根半島から大根島、宍道湖、中海周辺を「国引きジオパーク」と名づけ、人間と深くかかわりあう自然の保全活動をしていこうと呼び掛けられました。先生は「島根県」を外国の人に紹介するとき「ルーツ・オブ・アイランド」と言われるそうです。